

台湾および東南アジアにおける童乩信仰の研究

平成 20 年入学

参加したフィールドスクール：ベトナムフィールドスクール

調査地：シンガポール

前川佳世子

キーワード：霊媒, 漢民族, 台湾, シンガポール, 道教

自分の研究テーマについて

「台湾および東南アジアにおける童乩信仰」を研究している。1950 年代にシンガポールで行われたアラン・エリオットやレオン・コンバーなどの漢民族の霊媒や寺廟に関する調査は、当時調査しにくかった中国（この場合特に福建系の人々）の民俗宗教の一端を明らかにしてくれるものであった。

「童乩」とは、アラン・エリオットによると「無限のはかり知れない力を持った霊的存在が霊媒の体に憑依し、彼が何ら痛みを感じることなく自分の体を傷つけることを可能にし、また神智を以って語らしめ、信者たちに助言を与え、病気を癒す」[Elliott 1955:15] 宗教職能者である。私は台湾における童乩によるセアンスを通して、また台湾の人々の日常および儀礼時の神や祖先、鬼の祀り方を通して台湾の福建系の人々の民俗宗教的世界観を明らかにしたいと考える。そしてそのことを基に東南アジア各地に広く居住している華人の発想の特異性を知り、またその定着した地域の固有性も逆照射できるのではないかと考えている。

今回のフィールドスクール後に行ったシンガポールでは 1 週間足らずではあったが、見られる限りの寺廟を巡った。シンガポールには様々な種類の寺廟があるが、HDB の傍や住宅地の一角には童乩が活動しているかのような廟もあった。またヒンズー教の寺院では華人が仏教や道教の寺で拝むやり方で熱心に祈っている姿も見られた。



シンガポール・斉天宮

フィールドスクールから得られた知見について

今回のフィールドスクールでは、本研究科の教員以外に JICA ハノイ事務所、JVC 日本国際ボランティアセンターハノイ事務所、アジア開発銀行の日本人の専門職員の方々およびベトナム社会科学院社会学院のベトナム人研究者からベトナムの少数民族の現況と海外からの援助状況を講義形式で聞き、その後ムオン族の村において JVC の活動を実際に見学した。

この講義において有意義であった点は 1 つの援助という活動においても資金を提供する側、それを現地の人々に有意に利用できるように助ける側、またそれを受け取る側それぞれの思いを聞いた点である。そしてその後の村での見学は資金援助、人的援助がどのように行われているかを村の様子や村人の言葉から実際に知ることができた。そこで感じたことは、「援助は『人』である」ということである。援助する側とされる側お互いの信頼が成し遂げようとしていることへの結実につながると思う。実際に地域ごとに状況は様々でマニュアルは通用しないはずである。実務家の経験とキャパシティの広さが重要だと感じた。

またこのような活動が行われていることを日本の義務教育や高等学校で学ばせ広く知らせていくことが「人作り」や「世界を知ること」「他者への理解」につながると思う。援助機関はもっと日本国内でアピールすべきなのではないだろうか。



ホアビン省・ディックザオ村のムオン族の高床式住居



ホアビン省ディックザオ村にて歓迎を受ける

フィールドスクールで学んだことがどのように研究テーマにいかせるか？

ベトナム社会科学院社会学院のベトナム人研究者の通訳として参加された大西和彦氏はベトナム在住でベトナムの宗教が専門の研究者であり、今回は大西氏の「ベトナムにおける道教」の講義を聞くことが出来た。台湾やシンガポールの民間信仰についての知識はあったがベトナムにおける民間信仰、特に「聖母道」は私にとって初めての知識であった。「聖母道」は、女神信仰を中核にしたアニミズム・シャーマニズムに外来信仰の道教・仏教が混合した信仰体系であり、神々に憑依された「ドン（童）」と呼ばれるシャーマンが儀礼を行うという。このようなベトナムの民間信仰の状況は中華文明の波及とその土着化を考えさせ、台湾やシンガポールにおける漢民族の霊媒信仰を研究する私にとって、新たな比較の視点をもたらしてくれた。



ハノイ・鎮国寺の聖母たち（画面後）

参考文献

Elliott, A. J. A. 1955. *Chinese Spirit-Medium Cults in Singapore*. The Athlone Press.

Comber, L. 1958. *Chinese Temples in Singapore*. Eastern Universities Press.

エリオット, アラン. 1995. 『シンガポールのシャーマニズム』佐々木宏幹監修, 安田ひろみ・杉井純一訳, 春秋社.